

『映画手帖』にみる戦後広島における音楽ホールの公演状況に関する考察

堀田 佳苗

(本講座大学院博士課程前期在学)

The Consideration the Situation of Public Performances at Music Halls in Postwar Hiroshima According to the Contents of *Eiga Techo*

Kanae HOTTA

After the war, there were no music halls in Hiroshima because of the Atomic Bomb. So, citizens were eager to establish a large music hall with excellent facilities. As a result, Hiroshima Public Hall was opened in 1955. Hiroshima Public Hall was the first music hall in postwar Hiroshima. Since then, many concerts of various types were performed and musical activities spread widely in Hiroshima. So, Hiroshima Public Hall is the most important music hall in postwar Hiroshima. From the above thing, considering the situation of Hiroshima Public Hall is valuable. The purpose of this study are surveying the situation of public performances at Hiroshima Public Hall and some main music halls in postwar Hiroshima according to contents of *Eiga Techo* and considering the characteristics of each hall or the relationship to one another. The reason for using *Eiga Techo* in this paper is due to the high value that article because it is the oldest town magazine in Hiroshima. And I take these four music halls, Hiroshima Public Hall, Hiroshima Youth Center, Kenshin Public Hall, and Hiroshima Postal Savings Center in this paper. Because they were popular music halls in Postwar Hiroshima, so the situation of their performances are worthy of comparison with Hiroshima Public Hall's. As a result of this study, the number of performances of other music halls was decrease because of opening Hiroshima Postal Savings Center. But the performances were carried out utilizing the characteristics of each halls, separating the contents of performances have been made.

はじめに

1945(昭和20)年に終戦を迎えた後、広島市内の音楽ホールとして用いられていた施設は原爆でほぼ壊滅状態にあった。そうした中、広島児童文化会館や広島中央公民館の設立により市民の文化活動は再生の兆しを見せた。とはいえ、これらの施設はいわゆる多目的ホールであり、音楽に特化した施設ではなかった。こうしたことから、文化活動の再生と広がりにともない、優れた設備を持った大規模な音楽ホールの必要性が叫ばれるようになった結果、1955年(昭和30年)に広島市公会堂が設立された。このホールは初の音楽に特化した大規模ホールであったため、「広島の文化状況は公会堂抜きでは語れないほど、市の拠点施設として貢献した」(被爆50年記念史編集研究会編2001, p.267)とされる。実際、戦後広島での広島市公会堂の重要性を鑑みると、広島市公会堂が戦後広島の音楽界に果たした役割には特別な意味があるといえ、その研究価値は非常に高いと考えられる。このことから、筆者は戦後広島における音楽活動の広がりの中で広島市公会堂がどういった役割を果たしていったのかということに関して調査を行った。研究にあたってはまず、広島市公会堂の公演許可証と公演プログラムを基に調査を行うこととし、そのうち、公演許可証に基づいて広島市公会堂の公演状況に関して調査を行った(堀田2012)。加えて本論において、広島市公会堂が開館した1955年(昭和30年)から、その歴史に幕を下ろす1985年(昭和60年)¹⁾

までの30年間に設立された他の音楽ホールやそれに準ずる施設の公演状況に関しても同様のデータ分析を行い、それぞれ比較をすることで、より客観的な考察を行うこととする。今回比較対象として取り上げるのは、広島市公会堂の閉館中に存在していた施設の中で主要なものとして、同程度の規模や知名度をもつと考えられる見真講堂²⁾、広島市青少年センター³⁾、そして広島郵便貯金会館⁴⁾とする。これらの施設の公演状況については、筆者が知る限り広島市公会堂のように完全な形で公的資料は存在しないが、『映画手帖』という雑誌を用いることによりおおよその公演状況を比較検討することができる。この『映画手帖』とは、1953年(昭和28年)9月に映画手帖広島支社より刊行されて以降毎月一度出版されていた、映画を主要なテーマとして扱った当時の娯楽雑誌である。その中に毎月の各ホールの公演情報を掲載した記事が存在していた。もちろんこの記事は、必ずしもすべての公演を網羅しているわけではないが、それでも大まかな公演内容を知ることが可能である。また、『映画手帖』はタウン誌としては全国で5番目に創刊され、50年という長い歴史をもった由緒ある雑誌であり(中国新聞1987年8月8日、朝刊)、その資料的価値も高いと考えられる。以上のことから、この『映画手帖』に記載された公演情報の記事をもとに、他ホールの公演状況に関してデータを収集することとした。データとして取り上げる年代は、1969年(昭和44年)から1985年(昭和60年)までとする。今回扱う3つのホールの中でも、ホールの規模が広島市公会堂にきわめて近いために比較に際してもっとも重要であると考えられる広島郵便貯金会館の開館が1972年(昭和47年)であることから、昭和40年代は広島において最初に主要な音楽ホールが出そろった時期であると言える。そのため、非常に重要性が高く、考察に値すると考えられる。また、その昭和40年代の中でも、資料として用いる『映画手帖』に関して1969年(昭和44年)以前に刊行されたものは筆者の知る限り存在せず、入手できない状態である。以上のことから、本論においては1969年(昭和44年)からのデータを取り上げることとした。一方、1985年(昭和60年)までとしたのは、1985年(昭和60年)が広島市公会堂の閉館の年度であるためである。前述の広島市公会堂の重要性を根拠に、広島市公会堂が閉館したという事実を戦後広島の音楽史における歴史的重要事項とみなし、1985年(昭和60年)をひとつの区切りとすることとした。これらのことから、1969年(昭和44年)から1985年(昭和60年)の『映画手帖』記載公演データを用いて、戦後の広島における音楽ホールの公演状況に関して考察を行うこととする。

I. 広島の戦後音楽史

1940(昭和15年)に設立された広島音楽連盟は、戦後井口基成、近衛秀麿らを招演したほか、レコードを通じた鑑賞会を定期的に催し、洋楽復興活動に尽力した。この他に、1946年(昭和21年)の6月に広島中央放送局内に設立された広島放送管弦楽団や広島放送合唱団等は、放送活動だけではなく各地で様々な活動を行い、地方での合唱普及活動に大きく貢献した(片桐1997, p. 28)。そうした活動の広がりを受け、音楽関係者が集まって会員相互の親睦を図る目的で広島演奏家協会が設立された。これらを契機に郷土演奏家の復興への意欲が結集され、復興への足掛かりが作られはじめた。1954年(昭和29年)にはパイプオルガンを備えた世界平和記念聖堂も建てられており、宗教音楽の面でも活動が行われたことが分かる(片桐1997, p. 28)。そうした中で、広島に音楽ホールがないことから、一流音楽家や団体が広島を素通りしてしまうという事態が明らかになり、音楽ホールの建設を求める声が市民の間に高まっていった。そもそも昭和20年代に音楽活動を行うにあたっては、広島児童文化会館と中央公民館などのいわゆる多目的ホールか、戦火を経てかろうじて残った宇品の鉄道局講堂等を用いていた(被爆50周年記念史編集研究会編2010, p. 195)が、これらの施設は規模や設備上の面で限界があった。こうした声を受けて、経済界の尽力により1955年(昭和30年)に充実した音響装置や舞台装置をもつ広島市公会堂が開館した。このことで昭和30年代には音楽活動がしだいに活発な勢いを示しはじめ、放送局の交響楽団や合唱団、またグループや学校単位の発表が行われるようになった。1964年(昭和39年)には広島市民交響楽団の旗上げ演奏会が行われ、大きな話題となった。昭和40年代の後半に入ると、外国からの来演活動や国内楽団の公演活動はますますさかんになった。地元での活動に関しては、1970年(昭和45年)に広島市民交響楽団が広島交響楽団と改称し、翌1971年(昭和46年)に広島県教育委員会より正式に認可されプロのオーケストラとしてスタートすることとなった。演奏の場としては1972年(昭和47年)に広島郵便貯金会館が開館した。当時としては最大規模であり、かつ優れた設備を備えた施設であったことか

ら、広島での音楽活動の幅がより広がっていった。加えて、昭和50年代後半には各区に区民文化センターが設立されはじめたことから、市内中心部だけではなく様々な地域に音楽活動が展開されるようになったとも考えられる。さらに昭和60年代以降、広島厚生年金会館の開館を皮切りに、広島国際会議場(フェニックスホール)、さらにはアステールプラザ等の開館で大規模ホールが充実することとなり、現在に至る。

このように、戦後の広島では、戦火に焼かれ演奏の場も材料も何もない状態の中から、郷土の演奏家たちや文化事業に携わる人々が地道に活動を行っていった。その結果、各地域に音楽を享受する場である音楽ホールが整備され、かつ音楽を与える側である演奏団体も地域に根差したものが数多く誕生し、活発な音楽活動が営める状態にまで復興を遂げていったのである。また、芸術という潤いを渴望する市民の心が、そうした音楽活動の広がり際に際して大きな後押しとなっていった。

II. 『映画手帖』の概要

『映画手帖』のデータを扱うにあたり、まずその歴史を概観したい。1953年(昭和28年)9月、松岡秀明の発案により映画手帖広島支社から『映画手帖』の創刊号が発行された。前述の通り日本全国における地方のタウン誌の中で5番目の創刊であり、その歴史は長い。映画手帖広島支社はのちに、広島映画手帖社と名称を改める。創刊号はタテ9.5cm、ヨコ27cmの変形判⁵⁾で、10,000部を広島市内の中心部4館において無料で配布した(広島映画手帖社1982, p. 70)。当時は活字に飢えた時代であったことから、2日間でそのすべてを配布しきったという。第3号から定価を10円とし、映画館、煙草店等で売られるようになった。編集室は広島市中島本町においた。1954年(昭和29年)、新年号から現在のB6判変形となる。また、呉支局が開設し、同時に呉版も発行するようになった。1956年(昭和31年)2月号から、呉版に続き尾道、三原版の発行を開始した。同年6月より編集室を猿楽町に移した。1957年(昭和32年)、全国的に映画の黄金期を迎えたことを契機に、広島でも「広島映画サークル協議会」、「エスポワール」といった映画鑑賞団体の活動が活発化し、『映画手帖』の類似誌が次々と発刊されたが、のちに姿を消していった。そうした中で『映画手帖』が発行され続けたのは、「映画」と冠していながらも映画に特化するのみではなく、幅広い情報を盛り込んだ内容であったことが大きい。しかし1956年(昭和31年)に開始されたテレビ放送をきっかけに、映画の斜陽化が始まる。これにともない『映画手帖』の発行部数も減少の一途をたどり、1966年(昭和41年)には4000部となる。1969年(昭和44年)4月号⁶⁾より定価は50円、中綴じ製本となった(広島映画手帖社1982, p. 74)。同年12月、創刊者松岡秀明から久村敬夫に編集・発行権のすべてが譲渡される。これを最後に、松岡は一線を退くこととなった。編集室も府中町へと移し、『映画手帖』は新たなスタートを切った。1972年(昭和47年)の新年号⁷⁾より定価を100円とし、同年4月編集室を紙屋町へと移した(広島映画手帖社1982, p. 75)。1973年(昭和48年)になり部数は10,000部に達したが、同年秋のオイルショックにより慢性的な紙不足が生じ、それまでの印刷価格の高騰も相まって大きな打撃となった。『映画手帖』刊行にあたっては紙の調達に東奔西走することとなったが、決死の努力の結果、他誌が休刊、廃刊となる中でも何とか刊行にこぎつけることができた。1974年(昭和49年)新年号⁸⁾より定価を150円とし、1975年(昭和50年)新年号⁹⁾より、定価を200円とした(広島映画手帖社1982, p. 75)。部数は8,000部まで落ち込んでいたものがふたたび10,000部の大台に乗った。1976年(昭和51年)7月、広島映画手帖社は法人化され、取締役会長に松岡秀明、代表取締役編集長に久村敬夫が就任した。新編集室は1977年(昭和52年)6月、市内中区紙屋町に新築された紙屋町ビルの3階に設けられた。同年8月号より、呉市、東広島市を本格的な販売エリアとして、上映スケジュールを掲載するだけにとどまらない記事構成のために、精力的な取材体制を敷いた。その結果、発行部数は創刊25周年記念9月号から13,000部、1978年(昭和53年)新年号より15,000部、1979年(昭和54年)8月特大号では20,000部となっていった(広島映画手帖社1982, p. 76)。昭和50年代に入り、オイルショックからようやく脱したちょうどこの頃、タウン誌ブームともいべき時代が始まる。広島もその例にもれず、1977年(昭和52年)に創刊された『タウン情報ひろしま』を皮切りに、『ぴーぶる』、『フリーク』、『ウインク』と、実に5誌が出そろったこととなった。そうした中であって『映画手帖』は、内容の面で他誌との差別化を図っていたことから、これといった影響を受けることもなく順調に刊を重ねていった。1980年(昭和55年)から、ニュートラベル広島と共催で「映画手帖読者ツアー」を毎年8月に実施するようになったほか、1981年(昭和56年)3月号より中四国・九州主要都市の映画街の実情を探るキャ

ンペーンを展開し、その連載が好評を博す。同年6月号より表紙をカラーにし、25,000部を発行した（広島映画手帖社1982, p. 77）。1982年（昭和57年）、創刊30周年記念特大号として30,000部を発行する。1983年（昭和58年）8月、創刊者である松岡が逝去。誌面でも大きく取扱い、その死を悼んだ。このように、精力的に広島市民の娯楽を支えてきた『映画手帖』であったが、1986年（昭和61年）2月にその誌名を変更することを内定した。そして創刊35周年の節目である1987年（昭和62年）の8月号をもって、終刊を迎えた。その背景には、レジャーの著しい多様化にともなう読者のニーズの変化があった。終刊ののちには、『月刊レジャー広島』と改題し、映画だけではなく旅、温泉、テレビといった様々なジャンルの情報を網羅した雑誌へ再出発を遂げることとなった。なおこちらの雑誌も、2002年（平成14年）に終刊となっている。その歴史は、『映画手帖』の頃から数えると実に50年という長期にわたるもので、同時期に創刊したタウン誌の中では最長を誇った（中国新聞1987年8月8日、朝刊）。

こうして『映画手帖』は、「戦後」から抜け切れない広島市民に心の潤いをもたらし、昭和30年代半ばからの「映画斜陽」にともなう苦しい時代、また休刊か、廃刊かと言われたオイルショック等様々な困難の中にありながらも、何としてもその灯を消さないよう試行錯誤し様々な工夫を凝らし続け、最後まで地域に密着した愛される雑誌としてあり続けた。

Ⅲ. 『映画手帖』データの考察

ここでは、前述の『映画手帖』に記載されていた公演データを用いて広島市公会堂とその他の音楽ホールとの公演状況の比較を行っていく。なお『映画手帖』に関しては、完全な状態で入手できるのが1969年（昭和44年）から終刊の年である1987年（昭和62年）までのもののみであったため、今回用いるのは1969年（昭和44年）以降、1985年（昭和60年）までのデータとする。またここでいう「その他の音楽ホール」に関しては、その規模や公演状況を鑑み、広島市公会堂の稼働期間中に開館した主要なホールとして、比較に値すると考えられる見真講堂、広島市青少年センター、広島郵便貯金会館の3館とした。これら3館と広島市公会堂に関して、『映画手帖』内に記載されている公演情報のすべてを抽出し、それぞれ比較し分析を行っていく。

まず、『映画手帖』における記載公演数の合計を、ホール別に比較した。その結果を以下の図1に示す。

(件)

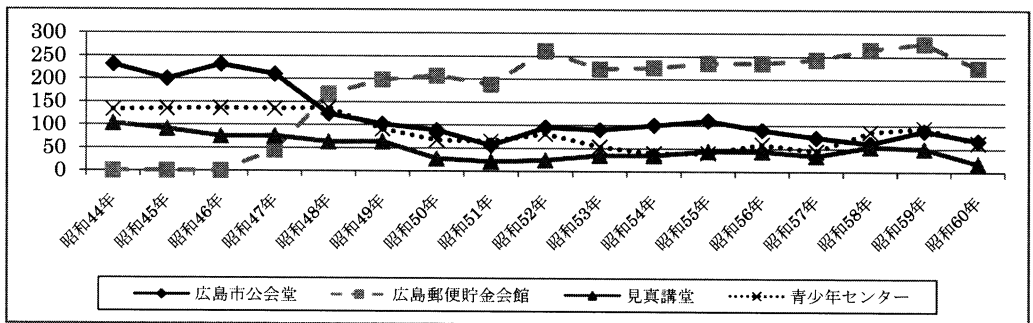


図1 各ホールの昭和44年～昭和60年間に於ける『映画手帖』記載公演数推移

特筆すべきは、広島郵便貯金会館が開館した1972年(昭和47年)以降の各ホールの記載公演数である。図1によると、1972年(昭和47年)以降は急速に広島郵便貯金会館での公演の記載分量が増加していることが見てとれる。それに対して他ホールでの公演の記載分量は減少している。このことから、広島郵便貯金会館が開館したことでそちらの方に急速な催し物の流入がおこったのではないかと仮説が立てられる。これは、広島郵便貯金会館の座席数が1861席(開館当時)と最も多く、音響施設や舞台設備に関してその当時最新のものであったことから当然のことと考えられる。一方、図2に示したのは、広島市公会堂の許可証データより筆者が作成した広島市公会堂における1969年(昭和44年)から1985年(昭和60年)までの全公演数の推移である。これによると、1972年(昭和47年)の広島郵便貯金会館開館以降、広島市公会堂において劇的な公演数の減少が生じていたとは言い難い。これらのことから、広島市公会堂に関しては広島郵便貯金会館完成以降、雑誌の掲載分量が減少したことから、やはり話題性については少し下火になったと言わざるをえないが、実際の公演に関してはそこまで影響を受けず着実に行われていったのではないかと考えられる。

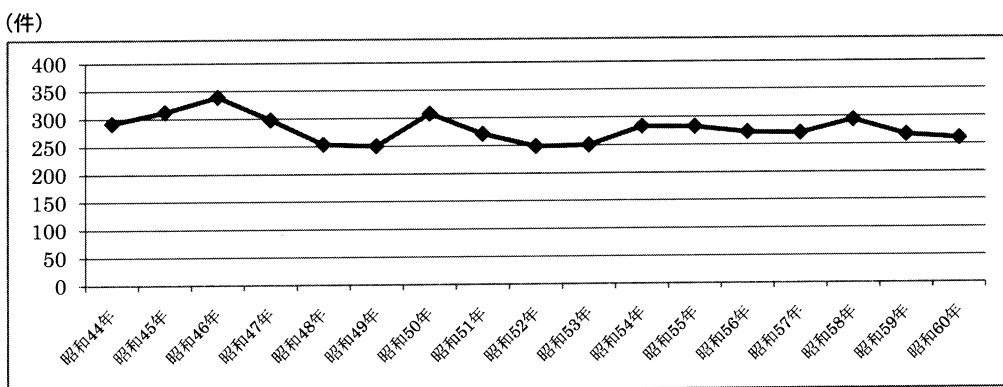


図2 広島市公会堂の昭和44年～昭和60年間に於ける全公演数推移

次に、実際の公演内容の観点から各ホールの公演状況を比較していきたい。比較を行うにあたっては、広島市公会堂の公演内容に関して筆者が行ったジャンル分類(堀田2012, p. 191)を他ホールの公演に関しても同様に適用することとする。具体的にはまず音楽関係の催し物の分類を①クラシック音楽、②純邦楽、③民俗音楽、④ポピュラー音楽、⑤民族音楽とした。次に音楽以外の催し物の分類を、b 舞踊、c コンクール、e 演芸、f ファッション関係、g 演劇、k 公開録音、ko 講演会、m 映画、s 式典とした。なお、これらのジャンルのどれにも属しないと筆者が判断した催し物は、その他とした。また他ホールに関しては、『映画手帖』に記載された情報のみで公演内容が類推できない場合はジャンル不明とした。以下の図3に、各ホールの公演ジャンル別割合を示した。なお以下のグラフ中での「総公演数」とは、『映画手帖』記載分のみを累計した値とする。まず注目すべきは広島郵便貯金会館におけるポピュラー音楽ジャンルの公演数の多さである。実に、記載全公演数の約半数をポピュラー音楽が占めていることが分かる。とくに音楽ジャンルのみ限定すると、その全公演数に対してポピュラー音楽ジャンルの占める割合は72%にもなることが分かった。このことから、広島郵便貯金会館に関しては音楽ジャンルの公演の中でもとりわけポピュラー音楽を中心に扱うことが多かったと考えられる。これに対して広島市公会堂をはじめとする他ホールは、他のジャンルと比較してそこまで突出してポピュラー音楽の割合が多いとはいえない。このことから音楽ジャンルの公演に関しては、広島郵便貯金会館においてはポピュラー音楽、それ以外のホールにおいてはそれ以外の音楽というふうに、各ホールで公演ジャンルの棲み分けが確立していたのではないかと推測できる。

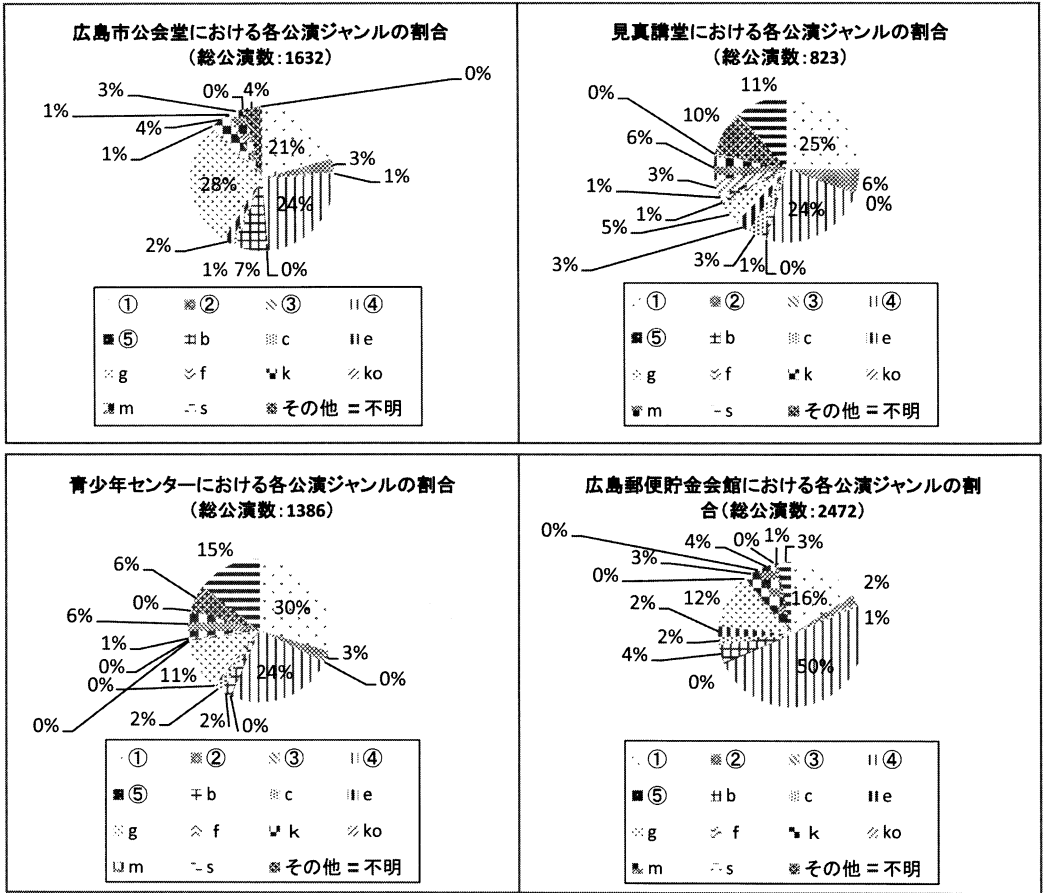


図3 各ホールにおける『映射手帖』記載分公演のジャンル別累計公演割合

これは、音楽ジャンルの公演以外にも各ホールの特徴としてあらわれている。広島市公会堂においては演劇の割合が他ホールに比べて多くみられ、一方、見真講堂においてはその他に分類される各種の集会などの割合が他ホールに比べて多くみられた。これらの要因はやはり、各ホールの舞台装置の仕様や施設規模の大小であると考えられる。『広島新史 社会編』（広島市編 1980）によれば、各ホールは広島市公会堂と広島郵便貯金会館が「大ホール」、見真講堂が「中ホール」、広島市青少年センターが「中ホール、研修、会議室」に分類される。座席数を考慮しても、広島市公会堂が1746席、広島郵便貯金会館が1861席（開館当時）、見真講堂が724席、広島市青少年センターが620席と、規模の違いは歴然としている。こうした各ホールの状況から、規模の大きなホールではそれだけ大掛かりな舞台装置を用いた公演や、大規模な楽団やバンドによる演奏が可能となってくるし、規模の小さなホールではそこまでの規模の公演はできないまでも、決して音楽や演劇などに特化しない幅広い分野での文化活動を展開できるといったように、各ホールの規模に応じた特色ある公演状況を読み取ることができる。このことに関連して、各ホールの総記載公演に対する、大学生によるサークル活動や中高生のクラブ活動の一環としての公演数の割合を以下の図4に示した。図4によると、広島市青少年センターにおける公演の割合が非常に高いことが分かる。これは、広島市青少年センターが地域の青少年の活動を支援する目的のホールであることや、中・小規模の活動に適した規模のホールであることを考慮に入れると当然の結果であるといえる。

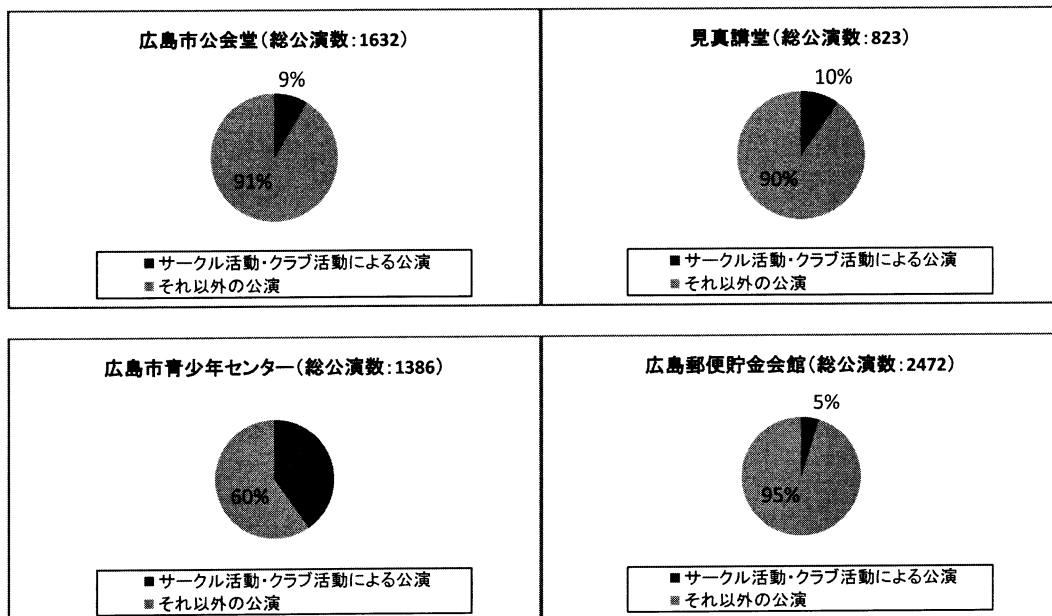


図4 各ホールにおける学生のサークル活動・クラブ活動による公演の割合

これに対し、広島郵便貯金会館における割合は非常に少ない。広島郵便貯金会館程度のホールであれば、それに見合った大規模な公演や、国内や海外で活躍する著名な人々を招聘して行う場合が多かったということが推測できる。このように、各ホールの特色を生かした公演が行われていたことが『映画手帖』のデータからうかがえる。

おわりに

今回の『映画手帖』データを通して、1955年（昭和30年）から1985年（昭和60年）にかけて広島において主要なホールとして存在していた広島市公会堂、見真講堂、広島市青少年センター、広島郵便貯金会館の4館に関してそれぞれの公演状況を概観してきた。その結果、1972年（昭和47年）の広島郵便貯金会館の開館以降、他3館の『映画手帖』記載公演数は減少していたことが分かり、広島郵便貯金会館の開館が及ぼした影響は大きかったという結論に達した。その一方で、他のホールは舞台の規模等それぞれの特色を生かした公演を行っており、各ホールで公演内容の棲み分けがなされていたということも分かった。また、広島郵便貯金会館に関しては全公演に対してポピュラー音楽公演の占める割合が非常に高く、どちらかといえばポピュラー音楽、それもサークル、クラブ活動の類ではなく純然たるプロによる公演に特化したホールであったことも興味深い。広島郵便貯金会館の開館をきっかけに、広島において都市部や海外で活躍する歌手や各種バンドを招聘して行う公演がさかんになったことが推測できる。このように戦後の広島においては、広島郵便貯金会館を筆頭に複数のホールが競合する中で、それぞれの特色を生かして市民の幅広い文化的需要に答えていったのである。それがひいては市民の文化活動への啓蒙につながり、市民レベルでの活動をもりたてる契機になったのではないかと筆者は考える。そこで今後は、今回の『映画手帖』データから得られた他ホールの稼働状況を参考にしながら、どういった人々あるいは団体によって公演が行われていたのかということに引き続き着目し、戦後の広島において広島市公会堂がどういった役割を果たしていったのかということに関して最終的な結論を得たい。

【注】

1) 広島市公会堂の閉館は本来1986年（昭和61年）3月のことである。しかし公演許可証に関して昭和60年までのものしか所蔵されておらず、現段階で昭和61年1月～3月間の許可証を入手する方法が

見つからなかった。この公演許可証データが研究の基礎となっていることから、本稿においても広島市公会堂に関しては昭和60年までのデータにもとづき論を進めていくこととする。

- 2) 1962年(昭和37年)に開館。1998年(平成10年)に閉館。ホール固定席724席。
- 3) 1966年(昭和41年)に開館。現在も稼働している。ホール固定席620席。
- 4) 1972年(昭和47年)に開館。当初は「広島郵便貯金会館」として開館したが、1991年(平成3年)の広島中郵便局改築にともなう存続問題を経て、ホール機能に特化した別の施設として新たに「広島郵便貯金ホール」となる。2007年(平成19年)より県営の施設となり、2012年(平成24年)までの5年契約でネーミングライツを広島総合警備保障が取得。「広島県立文化芸術ホール」(通称 ALSOK ホール)と名称が改まる。2012年(平成24年)以降は、学校法人上野学園がネーミングライツを取得し「上野学園ホール」となって、現在も稼働している。なお本論では開館当初の「広島郵便貯金会館」の名称を用いることとする。ホール1794席。
- 5) 18ページ構成。
- 6) 38ページ構成。
- 7) 56ページ構成。
- 8) 新年号は66ページ構成、2月号から54ページ構成。
- 9) 70ページ構成。

【引用・参考文献】

浜井信三(1967)『原爆市長』朝日新聞社。

被爆50年記念史編集研究会編(2001)『街と暮らしの50年 被爆50周年図説戦後広島市史』広島市企画総務局公文書館。

広島映画手帖社(1969-1985)『映画手帖』第17巻～第33巻, 広島映画手帖社。

広島市(1980)『広島新史 社会編』広島市, pp. 114-149。

堀田佳苗(2012)「戦後における広島市公会堂の役割に関する研究—公演許可証にみるジャンル別公演数の推移—」『音楽文化教育学研究紀要』XXIV, pp. 187-194。

今中比呂志(1987)「広島市公会堂の成立」『広島市公文書館紀要』第10号, pp. 93-106。

片桐功(1997)「戦後広島の音楽」比治山大学公開講座『広島の文化50年』pp. 27-38。

久村敬夫(2003)「ヒロシママガジン」ザ・メディアジョン。

宮本善樹(1973)『広島文化叢書1 平和公園 広島神話から』広島文化出版。

新藤浩伸(2007)「都市部における公会堂の設立経緯および事業内容に関する考察—大正～昭和初期を中心に」『日本社会教育学会紀要』第43号。

新藤浩伸(2010a)「戦前期における公会堂の機能に関する考察—日比谷公会堂を対象に—」『文化経済学』第7巻第1号。

新藤浩伸(2010b)「近代日本における音楽演奏会場の位置づけに関する考察—日比谷公会堂を中心に—」『東京音楽大学研究紀要』第34号, pp. 49-71。